



店内のある部分を抜けると、そこには6畳ほどの部屋が現れる。だがそこはドクロが主流の可愛らしいグッズが置かれている。さらにその先にまた部屋があり、そこはドクログッズだけになる。けれど驚くほどではない。立入り禁止の札がついた扉。その奥が目指す場所である。

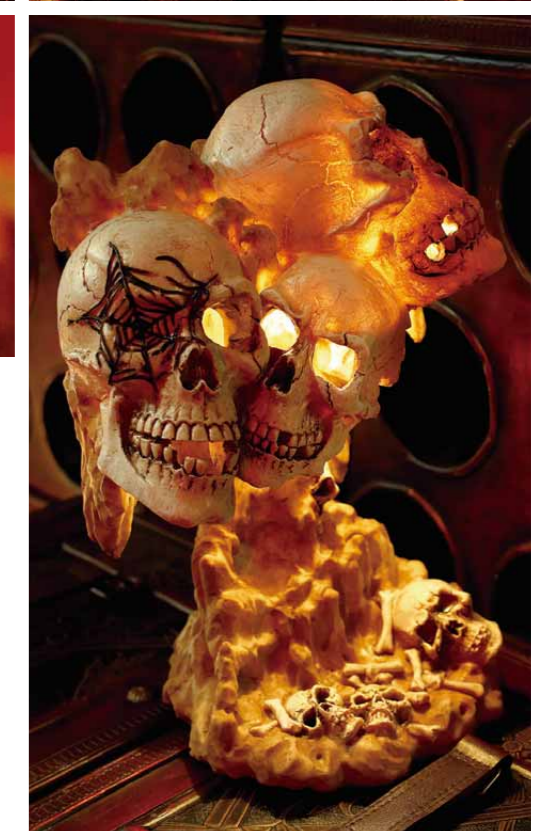


ホームページで全商品を見て買うこともできるが、チャンスがあれば一度「髑髏部屋」を訪れてほしい。しかし店内をいくら探しまわってもその部屋を見つけないことはできないだろう。取材に訪れた時にも店内をさんざん探してみたが見つめることはできなかった。それでもドクロが好きならスタッフに聞けばすぐに教えてもらえる。その異空間に必ず驚愕することだろう。

オーナーの西さんには、元々証券会社に勤める証券マンだった。しかし株という証券に狂喜乱舞する人間の浅ましさは垣間見えて嫌になり、雑貨屋経営に至るのだが、その間にあった人生の荒波の中でドクロの貯金箱をたまたま手に入れた。なんの変哲もない。だからその本物に近いその形を見つめ「誰しも最後はこうなるんだ」ということに気がつき、それなら怖いものなど何もないのではないかと、前向きな気持ちにさせられた。

「死の象徴ではなく、そうなるまで必死に生きてやろう」という象徴としてドクロの魅力に取り憑かれた。雑貨屋の片隅に少しずつドクロが増え、今では専用の部屋ができるほどまで増えた。将来は部屋ではなく「髑髏館」を作りたいと言ったが、現状のすごさを見ればそれは割と近い将来に実現してしまいうちに思える。お世辞にも綺麗とは言えない外観の「ネバーランド」。驚くことに若い女性お客さんが多い。それはきっと堂々と胸を張って夢や希望を話せるオーナーの影響だろう。

オーナーの西さんには、元々証券会社に勤める証券マンだった。しかし株という証券に狂喜乱舞する人間の浅ましさは垣間見えて嫌になり、雑貨屋経営に至るのだが、その間にあった人生の荒波の中でドクロの貯金箱をたまたま手に入れた。なんの変哲もない。だからその本物に近いその形を見つめ「誰しも最後はこうなるんだ」ということに気がつき、それなら怖いものなど何もないのではないかと、前向きな気持ちにさせられた。



「髑髏部屋」の中にはドクロ商品と一部ホラー商品しか置かれていない。商品も見ただけでは見つからないような場所に隠れていたりする。



地元のお客さんが買って来たグッズをオリジナルカスタムを施して「飾ってもらえませんか」と持って来た品々。ドクロに羽をつけたフィギュアや、オリジナルペイントですっかりと雰囲気を変えた商品。楽しみ方もいろいろある。ここでしか見つからないレアグッズもあり。